

看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究（第4報）

－入学時と卒業時における比較検討－

大江 基 加城貴美子 竹内文生 美田誠二 青木康子 井澤方宏 柴原君江 國岡照子

要 旨

1995年に開学して以来、本学の看護学生の集団特性を明らかにする目的で各種の性格テストを行ってきた。本研究は、1995年度に入学した学生の1年次と卒業時のYGテスト、および自尊感情尺度の結果を比較し、学生がどのように変化したか、およびその変化の要因について検討した。結果は以下のとおりである。

- 1 YGテストの12特性で見ると、卒業時は1年次の時よりも劣等感および神経質度が低くなり、また、より協調的になっていた。
- 2 YGテストの6個の集合因子で見ると、卒業時の方が情緒的安定性が高まり、衝動性がより小さくなっていた。
- 3 YGテストの5類型では、入学時と卒業時の間で統計的に有意な差はみられなかった。
- 4 自己意識では、卒業時の方が、自尊感情が高くなっていた。
- 5 性格特性および自尊感情の変化と対処行動との関連を検討したが、いずれも有意な関連はみられなかった。

キーワード：YG性格検査 Self-Esteem 自己受容 自己成長 対処行動

I はじめに

健康にかかわる専門職を目指して入学してくる本学の学生は、同時に青年期後期にあり、発達課題としてアイデンティティーの確立を抱えている。彼らがどのように自己像を形成し、自己成長していくかを理解することは重要である。これまで、看護学生の性格特性や、自尊感情などの自己意識を継続的に調査してきたが^{1) 2) 3)}、本学では1998年3月、初めて卒業生を送り出した。そこで1995年度入学の第1期生について、入学間もない頃に調査した測定結果が、3年間の学び、専門知識・技術の修得、職業観の形成、実習体験その他様々な要因でどのように変容するか、また個々人の自己成長がどのように反映されるかについて、1年次と卒業時の比較研究を行う。

II 研究方法

1 対象：1995年度入学生に関して、1年次は80名を対象とし、研究に同意の得られた77名。卒業時は卒業生76名を対象とし、YGテスト実施に同意の得られた46名および、半構成的質問紙調

査に同意の得られた37名。

2 内容：

- ① 矢田部ギルフォード性格検査（以下YGテストと略す）
- ② 自尊感情尺度（Self-Esteem）（以下SEと略す）
- ③ 対処行動尺度（Ways of Coping Check List）（以下WCC Lと略す）

3 方法：集合調査および、留置法による半構成的質問紙調査。

4 調査時期：1995年6月9日～7月21日（1年次）
1998年3月5日～18日（卒業時）

5 分析方法：各測定尺度の全体を集計し、各尺度間でt検定および χ^2 検定を行った。統計処理は、汎用統計学パッケージSPSSを用いた。

III 尺度の説明

対処行動尺度（WCC L）について

対処行動尺度は、ラザラスのストレスコーピング理論⁴⁾に基づき、ラザラスとフォークマンによって開発された。ラザラスは対処行動を問題中心型対処

(problem-focused coping) と情緒中心型対処 (emotion-focused coping) に分類した。問題中心型対処とは、問題解決、決断、直接的行動等による環境および自己のコントロールである。情緒中心型対処は、事態の利害の程度を評価し直したり、悪いことの中にも何らかの利点を見つけたり、状況の意味を良く解釈する、というように認知を変えることにより、情緒的危機を調整する対処法である。

尺度は42項目からなっていたが、改訂版は47項目あり、因子分析の結果、以下の6個の下位尺度から構成されている。

1 問題解決対処 (problem solving)

No1~14

2 肯定的認知対処 (positive cognitive)

No15~24

3 社会的援助の探求 (seeking social support) No25~30

4 自己非難 (self blame) No31~34

5 希望的観測 (wishful thinking) No35~40

6 回避 (avoidance) No41~47

結果の整理法は、各設問に対して4件法で答えさせ、当該の対処法を「良く用いる(3点)」、「時々用いる(2点)」、「あまり用いない(1点)」、「全く用いない(0点)」の基準で各尺度別に合計得点を与える。

IV 結果

1 YGテスト12特性による比較

1995年度生の1年次と卒業時のYGテスト12特性の平均値および標準偏差はTable 1に示すとおりである。Figure 1は両群の平均点のプロフィールを示している。Figure 1から、両者のプロフィールは、ほぼ平行関係にあるが、卒業時の方がT(思考的外向)、A(支配性)、S(社会的外向)を除き、全体的に下回っている。

次に、各12特性毎に両群の平均値の比較を行った結果、Table 1に示すとおり、I、N、Coで有意差が見られた(p<0.05)。すなわち、卒業時の方が劣等感および神経質度が小さくなり、より協調的に

Table 1 YG性格テスト12特性の平均値の比較

n=46

	1995年度生1年次 M ± SD	1995年度生卒業時 M ± SD	t 検定
高得点---低得点 D 閉うつ性大---小	11.96 ± 5.42	10.30 ± 6.68	
C 気分変化大---小	11.00 ± 4.90	10.22 ± 5.70	
I 劣等感---弱	11.00 ± 6.06	9.13 ± 5.41	*
N 神経質程度---弱	11.04 ± 5.62	9.41 ± 5.76	*
O 主観的---客観的	9.04 ± 4.38	8.74 ± 4.63	
Co 非協調的---協調的	7.93 ± 4.16	6.52 ± 4.47	*
Ag 攻撃性強---弱	10.13 ± 3.80	9.50 ± 4.39	
G 活動性高---低	10.22 ± 5.64	8.76 ± 3.95	
R のんき---のんきでない	11.74 ± 4.18	10.54 ± 4.87	
T 内省性低---高	9.00 ± 4.25	9.87 ± 4.92	
A 支配的---服従的	9.07 ± 4.27	9.85 ± 5.46	
S 社会的外向---内向	12.09 ± 4.91	12.67 ± 4.74	

* p<0.05

なっていた。

2 YGテスト6因子による比較

次に、YGテストの基礎因子である12特性を、より上位概念でまとめた6個の集合因子によって1年次と卒業時を比較する。その結果、Table 2に示

Table 2 YGテスト6因子の平均値の比較

n=46

	1995年度生1年次 M ± SD	1995年度生卒業時 M ± SD	t 検定
高得点---低得点 情緒安定性 小---大	45.00 ± 18.55	39.07 ± 20.61	*
社会的適応性 小---大	27.11 ± 8.88	24.76 ± 10.24	
活動性 大---小	20.35 ± 6.61	18.26 ± 6.52	
衝動性 大---小	21.96 ± 6.84	19.30 ± 7.25	*
内省性 小---大	20.74 ± 6.29	20.41 ± 7.31	
主導性 大---小	21.15 ± 8.40	22.52 ± 8.97	

* p<0.05

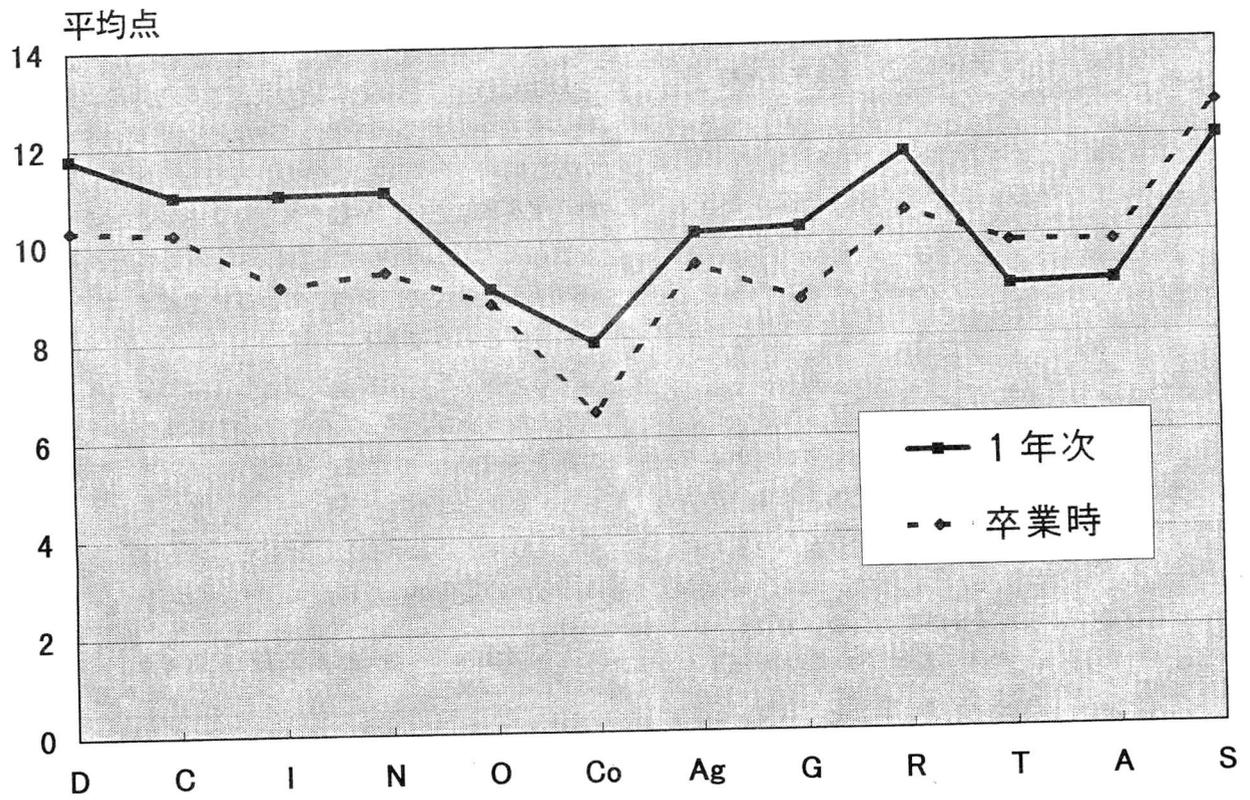


Figure 1 YGテスト12特性の比較

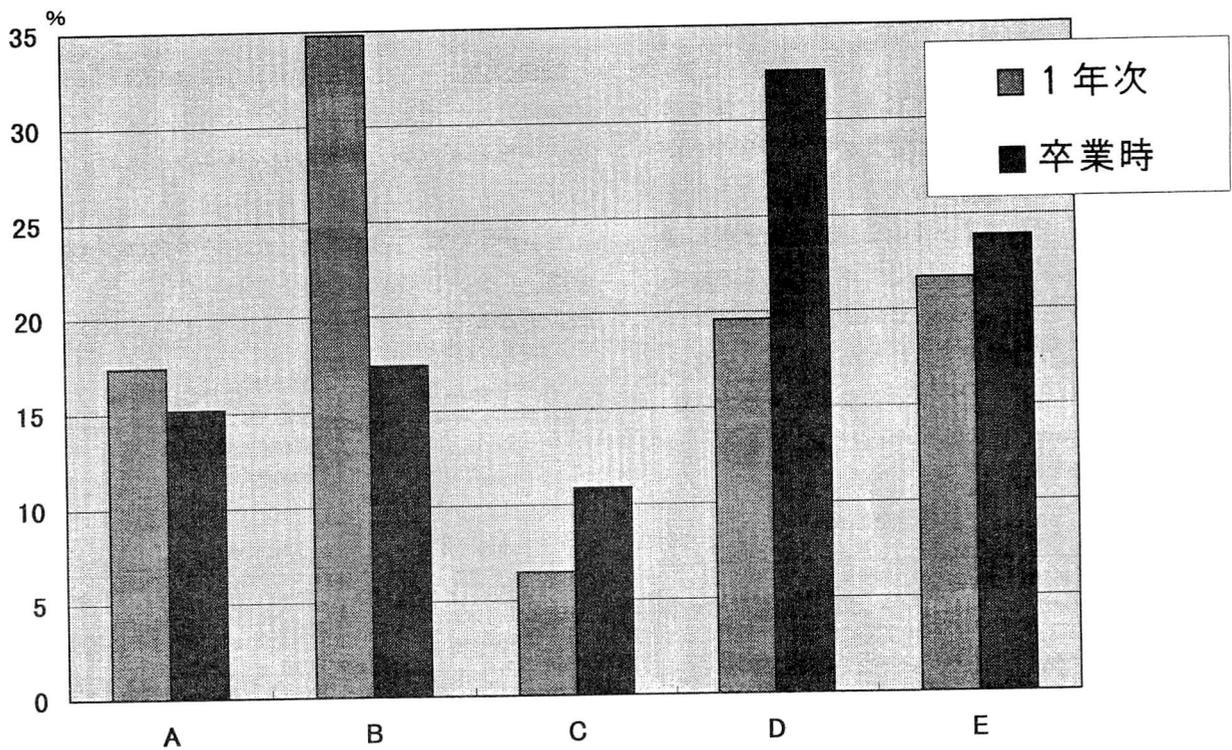


Figure 2 YGテスト5類型の年次比較

Table 3 YGテスト5類型の比較

類型	1995年度生1年次		1995年度生卒業時	
	n	%	n	%
A	8	17.4	7	15.2
B	16	34.8	8	17.4
C	3	6.5	5	10.9
D	9	19.6	15	32.6
E	10	21.7	11	23.9
n	46	100.0	46	100.0

すとおり、情緒安定性と衝動性においていずれも5%水準で有意差が見られた。すなわち、卒業時の方が情緒的に安定し、衝動性がより小さくなっていた。

3 YGプロフィール「5類型」について

YGプロフィールの型を、典型、準型、亜型の15タイプに分類し、さらにそれらをA型、B型、C型、D型、E型の5類型にまとめた。1年次および卒業時の各類型の度数分布はTable 3およびFigure 2に示すとおりである。Figure 2のグラフから卒業時の方がB型が減少し、D型が多くなっている状況が伺えるが、両群の度数分布の差について χ^2 検定で検討した結果、有意な差はみられなかった。

4 自己意識による比較

次に自己意識の観点からYGテストおよび自尊感情尺度(SE)を用いて両群を比較した。YGテストについては、第1報および第2報で得られた結果に基づき、YGプロフィールの理想自己像と現実自己像の差を自己受容の指標として用いた。その結果、Table 4に示すとおり、YGテストの「理想像-自己像の差」では有意差は見られなかったが、自尊感情尺度に関しては、1%水準で有意差があり、卒業時の方が自尊感情が高くなっていた。

Table 4 自己意識の比較

n=37

	1995年度生1年次 M ± SD	1995年度生卒業時 M ± SD	t 検定
理想-現実 自己差	82.83 ± 34.09	79.70 ± 33.20	
自尊感情	23.46 ± 6.13	25.65 ± 5.47	**

** p < 0.01

5 変化の要因分析

以上の結果に見られた1995年度生の1年次と卒業時の差を生じた要因を探るために、ストレスやいろいろな問題への対処行動のあり方を測定する対処行動尺度を取り上げ、YGテストによる変化との関連を検討した。1995年度生の卒業時の対処行動尺度(WCCL)の尺度別平均値および標準偏差はTable 5に示すとおりである。

YGテストを総括する指標としてはYGテスト5類型を取り上げ、同一人の1年次と卒業時の5類型の異同をTable 6にまとめた。Table 6に示すとおり、変化のなかったものは、A=2, B=7, C=0, D=4, E=6の、計19名であり、その他は何らかの変化がみられた。

Table 5 対処行動の下位尺度得点

n=37

下位尺度	M	SD
問題解決	27.43	7.02
肯定的認知	17.97	4.32
社会的援助探求	13.68	3.57
自己非難	6.62	3.45
希望的観測	8.16	4.15
回避	8.68	3.56

変化の方向としては、社会的活動性および情緒的安定性においてよりポジティブな方向へ変化したものと、よりネガティブな方向へ移ったものおよび、変化のなかったものとの3群に分類した。

ポジティブな方向へ変化したものの例は、A型、B型、C型、E型からD型へ変わったものなど13名、よりネガティブな方向へ移ったものの例はA型、

Table 6 YGテスト5類型の変化

		1995年度生卒業時					
		A	B	C	D	E	計
1995 年度生 1年次	A	2		1	4	1	8
	B	1	7	2	3	3	16
	C				2	1	3
	D	3	1	1	4		9
	E	1		1	2	6	10
	計	7	8	5	15	11	46

B型、C型からE型へ変わったものや、D型から他の型へ変化したものなど13名である。

一方、対処行動の尺度(WCCL)の6個の下位尺度をそれぞれ高、中、低の3群に分けて、YGテストの変化の3タイプとの間で χ^2 検定を行ったが、いずれの尺度との間にも有意な関連はみられなかった。

V 考察

これまで看護学生の性格特性について、継続的に見てきた^{1) 2) 3)}。将来、ヒューマンケアの現場で働くことを目指す看護学生にとって、自己成長は大きな課題である。3年間の学び、実習体験、その他いろいろな要因により、どのような成長を遂げているのか、性格特性の変化の後をたどってみる。

ここでは、YGテストのいくつかの指標および自尊感情尺度(SE)を用いて入学時と卒業時の比較を行った。

YGテストの12特性で比較すると、卒業時の方が劣等感と神経質度において明らかに低下し、他者に対する協調性が増している。この結果は、より上位概念でまとめた情緒安定性において増加し、衝動性が低下したことと一致しており、全体として、よりポジティブな方向へ変化したものが多いと言えるだろう。

YGテストの5類型について大沢⁵⁾は、看護学生は一般大学生に比してB型とD型が優位な外向的傾向が強いことを指摘している。また中山ら⁶⁾の研究によると、他の看護大学では4年次では1年次に比較してリーダー的なD型が増加していたが、本学では、グラフから見ると卒業時には1年次よりB型が減少し、D型が増えているような傾向が伺えるが、統計的に有意差はみられなかった。この点に関しては今後も継続的に調査していく必要がある。

次に、本学学生はほとんどが青年期後期にあり、その発達課題はエリクソンの言うアイデンティティーの確立である。アイデンティティーの概念は非常に包括的で捉えにくい面があるが、その中核は、自らが危機を体験し、進むべき課題に向かって自己を投入するプロセスを経て、自分が自分であること、すなわち、西平⁷⁾がまとめているように自我親和的な実感を達成することと言える。換言すると、自分が自分自身と違和感なく一体であることであり、自己受容とも一致する。

第1、2報^{1) 2)}を通じて、YGテストの理想自己像と現実自己像の乖離は自己受容の指標として有効であることが示唆された。そこで、青年の自己意識の観点から性格の変化をみるために、YGテストの「理想-現実自己差」と、自尊感情尺度(SE)を用いて検討したが、「理想-現実自己差」の指標では、1年次と卒業時には差がみられなかった。

しかし自尊感情に関しては卒業時の方が明らかに上昇しており、自己に対する肯定的見方や、自分に対する信頼が増していることが伺われる。

これらの変化が何に起因するか、その要因は、知識情報の学習、技能の向上、実習などの共通体験や、対人関係、アルバイト等の社会体験、個人的体験など多様であろう。しかし個別の私的体験を整理し、パターン化する事は非常に困難であり、ここでは中野⁸⁾の指摘するように精神身体的健康度との関係が近年注目されているラザラスの「対処行動」を1つの手がかりとして取り上げた。すなわち、ストレスや困難な事態に陥ったとき、その問題をどのように認知するか、また解決志向のスキルを身につけてきたかということ、結果として性格形成に様々な影響を与えらると思われる。

個人の性格の変化については1年次と卒業時におけるYGプロフィール(5類型)のタイプの変化によって捉え、ポジティブな変化とネガティブな変化、および無変化の3群に分類した。一方対処行動のあり方はラザラスの6尺度(問題解決、肯定的認知、社会的援助探求、自己非難、希望的観測、回避)の各々について、高、中、低の3群に分類し両者の関連を見たが、いずれも有意な関連はみられなかった。

VI おわりに

YGテストおよび自尊感情尺度によって入学時と卒業時の変化を分析した結果、いくつかの測度でポジティブな変化がみられ、個人の自己成長の跡が伺われたが、変化をもたらす要因を明らかにすることはできなかった。今後は要因分析の方策を工夫して、さらに入学時と卒業時の検討を行っていききたい。また、今回、YGテストは集団法で実施したが、対処行動尺度を含むその他の調査は留置法によったため回収率が上がらず、両者とも共通して回答した例数が少なく、十分な分析に耐えなかった。今後は例数を増やして、なお継続してみたい。

引用文献

- 1) 加城貴美子, 大江基他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究, 川崎市立看護短期大学紀要, 第1巻, 第1号, 23-33, 1996.
- 2) 大江基, 加城貴美子, 他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究(2), 川崎市立看護短期大学紀要, 第2巻, 第1号, 69-78, 1997.
- 3) 加城貴美子, 大江基他: 看護短期大学生の性格特性に関する基礎的研究(第3報), 川崎市立看護短期大学紀要, 第3巻, 第1号, 81-93, 1998.
- 4) 林峻一郎: ストレスとコーピング——ラザラス理論への招待, 屋和書店, 69-71, 1994.
- 5) 大沢正子: 看護学生のパーソナリティの特徴, 神戸市立看護短期大学紀要, 創刊号, 131-140, 1982.
- 6) 中山久子, 飯田澄美子: 単科大学における看護学生の健康管理に関する研究, 聖路加看護大学紀要, 19, 25-35, 1993.
- 7) 西平直: エリクソンの人間学, 東京大学出版会, 215-221, 1996
- 8) 中野敬子: 対処行動と精神身体症状における因果関係について, 心理学研究, Vol. 61 (6), 404-408, 1991.
- 9) 八木俊夫: YGテストの実務手引き——人事管理における性格検査の活用——, 日本心理技術研究所, 1992.

A Basic Research on Nursing College Students' Personality Traits (The fourth report)

— A comparison between students at the time of entrance and graduation —

Motoi OE Kimiko KASHIRO Humio TAKEUCHI Seiji MITA
Yasuko AOKI Masahiro ISAWA Kimie SHIBAHARA Teruko KUNIOKA

Abstract

We have administered several kinds of personality tests to clarify personality characteristics of our nursing students since 1995 when we opened our college. We compared the results of YG test and Self - Esteem Scale of freshmen with those at the time of graduation for the same 1995 - student. We also investigated the factors influencing their personality change or self growth. The results are as follows:

1. As to the 12 personality traits of YG test, the graduate students showed significantly less sense of inferiority and nervousness and more co - operation than freshmen.
2. As to the 6 collective factors of YG test, the former showed emotional stability and less impulsiveness than the latter.
3. There was no significant difference of 5 types of YG profile between the two groups.
4. As to Self - Esteem Scale, the graduate showed higher self esteem than freshmen.
5. We picked up stress coping strategy as one of the possible factors influencing their personality change. However, there were no significant relationships between each of 6 subscales of Stress Coping Check List(WCCL) and personality traits.

Key words:

Yatabe Guilford Personality Test
Self - Esteem
Self Acceptance
Self Growth
Coping Behavior